

キエラン・イーガンの教授理論：想像力を触発する授業¹

高屋景一（東京女子医科大学他 非常勤講師）

イントロダクション

本稿では、カナダの教育学者、キエラン・イーガン（Kieran Egan）の教育理論を紹介する。日本ではあまり知られていないが、北米等ではよく知られた人物であり、カナダ、ブリティッシュ・コロンビア州サイモン・フレーザー大学内に自らが設立した Imaginative Education Research Group (<http://www.ierg.net>) の活動や自身の著作を通じて、理論的な研究を実践に翻訳することをこころみている。学校教育に対する彼の見解はさまざまな領域に及ぶが、ここでは特に、どのようにしたら生徒が教科教育の内容に興味を持ち、なおかつ、その内容を効率的に学習するようになるかというカリキュラム論および教授論に焦点を絞る。また、彼自身は英語教育や ESL について特に発言しているわけではないが、私は日本の英語教育について有用な視点があるのではないかと感じているので、日本の英語教育をイーガンの視点から見るとどのようなことが言えるか考察してみたい。

イーガン理論の概要：想像力を触発する授業の枠組み

まず、指導案の作成から実際の授業までの指針的な事柄についてイーガンの提案を 4 点ほど述べてみる。彼が好んで用いる以下の概念やことばを使わずとも、有能な教師は似たようなことを実践しているのだが、彼らが直感的に実践していることを理論のことばでこのように表現することができるという一例になるだろう。

1. イマジネーション (imagination). 授業がうまくいかないという問題の一因は、生徒の想像力 (イマジネーション) を触発することに失敗しているからである。逆に言うと、生徒の想像力を刺激し触発することに成功するならば、授業はより効果的に、且つ楽しく意義あるものとなる。ここでいう想像力とはイメージ (心的映像) を思い浮かべる能力に限らない。イーガンによれば、想像力とは心または精神のはたらきの柔軟性 (flexibility) と活力 (vitality) である。決まった答えを覚え、それを問題にあてはめ

¹本稿は『ICU 教育セミナー30 周年記念誌』(ICU 教育セミナー 30 周年記念誌刊行委員会, 2008, pp. 111-4) より転載された。

るだけの「学習」においては精神の柔軟性や活力—例えば、積極的自主的な探究の態度—は必要とされない。むしろ邪魔にさえなる。

2. 感情への訴えかけ (emotion: hopes fears, and passions). 学問分野や教科としてまとめられている知識事項は、もとをたどれば誰かが希望や恐怖や情熱に突き動かされて取り組んだ活動の産物である。授業においてその結果である知識事項が単に覚えるべき単語や公式として示されるならば、生徒は自分に関係ある問題として学習に関わることができない。だから、教授の成功の秘訣は教授内容を、それがそもそも生じて来た、人間の希望や恐怖や情熱というコンテクストにおくことである。

3. 物語 (story). 物語というのは聞き手の想像力や感情を触発し、内容を印象づけ記憶に残るようにする最も効率的な方法である。教授を物語形式に構成することで、生徒は、それを生み出した人物の賢さなどと感情的な結びつきを感じるようになり、内容をよりよく覚えるようになる。ただしこれは、あくまで物語形式もしくは物語というコミュニケーションの形式の長所を生かすということであって、すべての授業をお話にせよというのではない。

物語としての授業構成においては、例えば、編集長が記者に、“What’s the story?”と聞く時の “story” のように、授業のテーマについて関心や興味の中心となる部分を探し出すことが重要となる。伝統的なカリキュラム構成原理のように、達成目標をまず同定し、その後学習者の現在の知識もしくは理解度とその目標とをつなぐ内容を適当なまとまりに分解し、目標に向かって筋道をつくるというやり方とはかなり異なった着眼点をとる。別の言い方をすると、カリキュラムは、達成目標というよりは伝えられる価値のある物語としてとらえられる。

4. 認知的道具 (cognitive tools). 教育の主要な機能は文化的道具 (cultural tools)、すなわち、それぞれの社会や文化が持っているコミュニケーションの仕方、問題解決の方法、知識の整理の仕方など、を個々の生徒が習得し、問題解決や学習やコミュニケーションに携わる際の自らの道具としてそれらを使用できるようにすることである。そして教育の過程とは社会が所有する文化的道具を個人の精神に備わる認知的道具にコンバートするプロセスである。文化的・認知的道具は私たち人間が持っている能力をより効果的に、力

強くしてくれる便利なものである。

そのような道具の中心に位置するのが言語なのだが、言語がそれぞれの文化ごとに独特であるように、文化的・認知的道具は必ずしもユニバーサルなものではない。特に以下に述べる「小さな道具」にはそれがあてはまるだろう。

認知的道具には大きなものとそれに付随する小さなものがある。例えば、ことばを覚えてからの頃から概して小学校低学年程度の段階では話し言葉 (orality) という大きな道具を人間は習得する。そして、話し言葉の習得には話し言葉によるコミュニケーションやそれを中心とする文化に特徴的なくつもの小さな道具の習得が含まれる。例えば物語形式、リズムや韻律である。その後、書き言葉 (literacy) の習得に進むのだが、これにも付随する小道具がいくつもあり、書き言葉の習得がある程度進むとそれに伴った思考やコミュニケーションの特徴—例えばリアリティーのセンス (客観的、合理的、論理的な理解) やヒーローに対する憧れ—が一般に小学校の高学年くらいから表れる (大きな道具とそれに伴う小さな道具の一覧は Egan, 2005 を参照)。

例を挙げる。5歳くらいの子どもは「シンデレラ」でカボチャとネズミがどのようなメカニズムや化学反応によって馬車になるのか、など問わずにお話の世界を受け入れることができる。それに対して10歳くらいの子の場合フィクションの世界に入り込むに際して、例えば、ウルトラマンはM78星雲からやって来た、重力の関係で3分しか地球上では動けない云々、というかなり詳細な設定 (本当らしさ) が必要になる。前者は主に話し言葉の段階の子どもの精神的特徴であり後者は書き言葉の段階の子どもの特徴である。前者には直感的な善悪や美醜などで話を進めるのに十分であり、後者はより細部にわたる情報や文脈によるリアリティーの感覚が問題となる。このような心の働きや性向を無視して、学年にそって単に「簡単・単純な」内容から「複雑・難解な」内容へとカリキュラムを構築するならそれはうまくいかない。

文化的道具を習得し内化 (internalize) することによって認知的道具とすることが学習だとしてとらえた場合、カリキュラム作成及び授業について留意する点はというと、例えば以下のようなことが挙げられる。

第一に、私たち教育者は、どのような言語形態がどのようなレベルで習得されているかによって、児童生徒の心の働き方に違いがあることを知っておくべきである。小学校低学年の子と中学生とでは学習の仕方、理解しやすい言語のモード、などが異なるのである。

第二に、ある段階から次の段階への移行をスムーズに行うためには、それぞれの道具の

習得の段階でその道具に特徴的なことばや経験のスタイルをふんだんに経験させてあげることが必要になる。

現代日本のカリキュラムは想像力を触発できるか？

では、以上のポイントを踏まえた、イーガンの視点から現代日本の学校教育、例えば英語教育を見るとどうだろうか。

まず確認しておきたいのだが、以上述べて来た諸点は教育学や認知科学の成果を踏まえた次の洞察にもとづいている。すなわち学習主体としての人間が単なる記憶媒体（例えばCD-ROM）と異なるいくつかの特徴である。第一に、主体的に対象に関われる点、第二に、提示された事柄を想像力を用いて他の経験と結びつけることができる、言い換えれば、ある事柄をふくらますことができる点、第三に、あることを聞いたり読んだりした時に感情をもって反応する点である。端的に言って、このような人間の学習の特性が生かされていないのが教科教育の失敗である。

例えば英語教育では、ことばが、その根底にある動作やイメージや感情的反応と結びついていないところに大きな問題がある。構文や語彙が動作やイメージや感情と結びついていないのである。もう少し具体的に言おう。中学校で習う5文型、助動詞、比較、関係代名詞、などが高校でもう一度出てくる。そして中学校と高校の違いは後者のほうがより複雑で高度な語彙を使用している文にそのような文法事項がうめこまれているということである。ここには言語の習得レベルの差に基づく思考パターンの違いや勉強のスタイルの違いなどは反映されていない。単に「単純な内容から複雑な内容へ」という18世紀以来の粗雑な教授原理があるだけだ。デューイなどの進歩主義が学問分野や教科の持つ「論理」よりは児童生徒の「心理」に着目し、彼らの「経験」にそって学習内容を精選、配置せよとしたことはそれまでの教授理論の批判としては鋭かったが、それに代わる構成原理として提出した「心理」や「経験」は依然として抽象的だった。この抽象性を克服する試みとして具体的な原理としての言語に着目したところにイーガンの独自性がある。

英語に限らないが、児童生徒が主体的に、楽しく関われ、且つ価値ある学習経験を提供できるカリキュラムやレッスン・プランを構成する原理として、言語の習得レベルに応じた経験のスタイルという案が提出されたわけである。日本の社会や学校文化と、イーガンが主に対象としている西洋社会・学校文化との違いなど分析の課題は多々あるが、学校教育の改善に向けた理論として考察に値すると思われる。

参考文献

Egan, Kieran. (1997). *The Educated Mind: How Cognitive Tools Shape Our Understanding*, Chicago, IL: The University of Chicago Press.

Egan, Kieran. (2005). *An Imaginative Approach to Teaching*, San Francisco, CA: Jossey-Bass.

CBC Radio Interview with Kieran Egan, Available at <http://www.ierg.net>